

週報

こひつじ

第40巻 42号
大津キリスト教会
菊池郡大津町室 119
TEL 096-293-4470
FAX 096-293-4961
牧師 米村 英二

今日の礼拝

○第一礼拝は午前10時から、
第二礼拝は午前11時から。

○教会学校は午前10時から。
○説教は米村牧師。

先週の礼拝

○司会は林田実季さん、奏楽は吉岡隆夫さん。

○説教は、一列王記二章七節の言葉から、ダビデが死ぬ前に、バエルジライという人物を思い起こして、彼の子どもたちに恵みを施すようにと、ソロモンに言い残したのは、なぜであったかについて語りました。

先週の出席

礼拝参加者は、第一礼拝が五五名、第二が三七名、合計九二名(男三四、女五八)。それに子どもが五名、合わせて九七名でした。

本と私

友人の牧師の便りに、長く奉仕していた教会をやめ、引越さなければならなくなったとき、かなりの蔵書の処分を余儀なくされた

が、それは大変つらい経験だったとありました。ぼくにもいつかそういうときが来るのかもしれない。そこで本についての最近のぼくの気持ちをこう書いて、その友人に返事を送りました。

*

ぼくも、これだけの蔵書を持つていっていると、どこへも引越せませぬ。あの地震で崩壊した書棚を見たときは呆然としました。天井まで本を積み上げるのはとても危険なことだったので。

そこで処分を覚悟しました。もう読まないとはっきりわかった本は捨てました。しかしどうしても未練があつて、捨てきれない本は、結局、大きな倉庫を買って、それに収め、中に棚を作り、いつでも取り出せるように配列しています。二階の長い廊下の本棚には、以前のように天井までではありませんが、やはりびっしりと本が詰まっています。本は一応著者別に並べていますが、地震後に本の場所が変わりましたから、しばらくは本を探すのに苦労しました。でも

今はもう新しい配列に慣れました。説教を続ける限り、本は欠かせません。また自分の本を書く場合も、引用箇所の確認がどうしても必要なのです。

長い間、こういう仕事をやってきたからでしょうか。不思議に一度読んだ本で印象に残ったところは覚えているんですね。説教の準備中に、ある思想が思い浮かぶと「あつ、それはあの本の中にあつた」と、だいたい探し出せるんです。

だから本はだれにもお貸しできません。いつ必要になるかわからなからです。でも、ぼくが死ねば、ぼくの本はみなゴミとなります。どんな本も線だらけで、古本屋は引き取ってくれないでしょうから。

伝道の道に進んでやがて六〇年、本はほんとうに役に立ってくれました。牧師仲間にはいろいろな趣味を持っていて人がいます。ゴルフをしたり、テニスをしたり、絵を描いたり。

ぼくに一つ後悔があるとすれば、

若い頃に、山登りができなかったことです。六〇を過ぎて、田部重治の『山と溪谷』という本に出会い、山に憧れました。今も、その憧れだけはあります。

いったいぼくの趣味は何だろうと、妻に聞いたら、妻はさすがずい言いました。

「読書以外にないんじゃないの」読書は、ぼくにとっては仕事と一つでもあつたのでしょうか。確かに、今も本が好きで、どこへゆくにも本を持って家を出ます。ちょっとした待ち時間も本がないときびしく感じられます。

最近、研究的な本は読まなくなりまして。どちらかというとろんな人の書いたエッセイを読むことが多い。それでも福音書だけは繰り返し読んでいます。そこにはイエス様の直接の言葉が書かれているからです。パウロの言葉に比べてずっと平明です。でも深い。そして慰められます。

結局、本がぼくの唯一の友だち